

下庄をよくする会

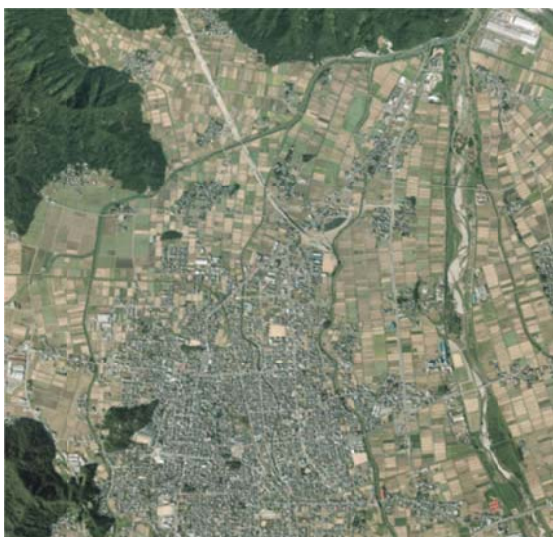
1 基本データ

- 地区名 下庄地区
- 人口 8,602人 (H30.1.1現在)
- 世帯数 2,893世帯
- 面積 約19.1km²
- 地区の沿革

下庄地区は大野市の北西部に位置し、勝山市に隣接している。昭和29年に2町6ヵ村が合併して大野市が誕生した時に、下庄町も大野市に編入された。

地区内には、国の九頭竜川ダム総合管理事務所や県の奥越土木事務所、奥越合同庁舎のほか、ビュークリーンおくえつ、奥越明成高等学校、大野警察署、大野郵便局等の官公庁等が集中しており、国道沿いには複数の郊外商業施設も進出している。また、中部縦貫自動車道の大野ICも当地区に設置され、平成25年3月24日から供用されており、国道157号の大野バイパス(東縦貫線)と併せて、市の東の玄関口としての整備が着実に進捗してきている。

- 実施主体 下庄をよくする会



下庄地区の航空写真：農村地域と市街地が混在している

2 現状と課題

下庄をよくする会では、昭和54年の発足以来住民主体のまちづくり運動の推進に努めてきた。本年度で30回を数える下庄まつりは地区内の各種団体が参加し、地区を挙げての行事となっている。毎年多くの来場者でにぎわい、地区民の交流促進、団結力の強化、地区の活性化に大きな成果を上げている。

また、地区内の一人暮らし、二人暮らしの高齢者宅に手打ちそばを届ける「まごころそばサービス」や河川や山際の環境パトロールなどの環境美化活動など、その活動は多方面にわたり、その活動に対し、数々の表彰を受けている。



花のまちづくりコンクール賞表彰式

これらの活動を支えるのは、地区内の各種団体から選出される委員と33地区から推薦される地区推進委員、そして会の趣旨に賛同するまちづくり運動協力者からなる約90名の委員である。しかし、まちづくり活動への意識には差があり、一部の委員に活動が偏りがちとなっている。

また、長く活動をけん引してきた役員も年齢を重ね、より若い年齢層への世代交代が思うように進んでいない現状がある。

こうした中、若い世代の地域づくり活動への参加を促すため、地区内の自然や史跡などの地域資源を活用しながら、自らも楽しめるような事業を企画、実施しようという趣旨に賛同する若者たちが集まって活動を始めた「しもしょう

を楽しむプロジェクト」も5年目を迎えたが、下庄地区の今後を担う後継者として育成するため、彼らが活動しやすい環境づくりを含め、引き続き支援をしていく必要がある。

また、地場産野菜の販路拡大と地区民の交流の場として、平成23年度にオープンした「下庄青空市」は7年目を迎え、地域に定着した新鮮朝市として賑わっている。周辺住民など固定客も増えてきたが、まだまだ出品登録者数が少なく、季節によっては品揃えが十分でないこともあり、経営の安定化とさらなるにぎわいを創出するため、誰でも気軽に参加できる直売所として、さらに出品登録者を増やすことが懸案となっている。



下庄青空市のにぎわい

3 事業の内容

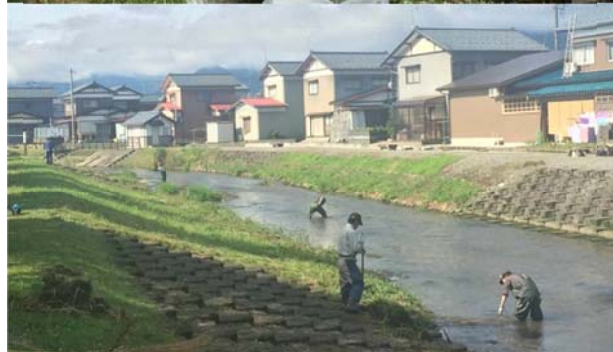
【後継者の育成：『しもしょうを楽しむプロジェクト』の取り組み】

5年目を迎えた『しもしょうを楽しむプロジェクト』の活動も、活動する会員が固定化してきていることもあり、本年は会員の増強に努めることとした。主催事業である『水の恵みに感謝し、身近な水環境に関心を持ってもらうこと』を目的とした「みずかわ感謝祭」は、木瓜川清掃をするクリーン作戦と恒例のダックレースのみとした。

下庄地区は水資源に恵まれた地域であることを再認識し、この水の恵みに感謝し、身近な水環境に関心を持ってもらうことを主眼に置き、住民参加型のイベントとなるよう取り組んだ。

下庄地区のまちづくりをけん引する下庄をよくする会だけでなく、地域の学校との連携により、下庄をよくする会の委員や陽明中学校の生徒が多数運営スタッフとして参加し、地域が一体となったイベントになった。

①木瓜川クリーン作戦(7月9日(日)午前8時～11時30分)



木瓜川クリーン作戦(7月9日)

ダックレース会場となる三角公園(月美町)からフォレストタウン(東中野)までの木瓜川流域で、陽明中学校生徒や一般ボランティアなども加わり、川の中や堤防のゴミ拾い、草刈りを行った。

③木瓜川ダックレース(7月30日(日)午前10時30分～正午)

木瓜川に背番号をつけた約350羽のあひるのおもちゃを放流し、着順を競った。事前にエントリー券を販売し、参加者らは自分のダックを追いかけてながら川に沿ってゴールまで移動した。



表彰式は河川敷で行った。

④下庄キャンドルナイト(1月26日(金)午後5時～7時)

下庄小学校のふるさと教育の授業にしもプロ会員が招かれて、3、4年生に活動を紹介

したことがきっかけとなり始めたこのイベントも、3年目を迎えることになった。

今回は、児童たちの地域活性化のためのイベントを行いたいという思いを尊重し、しもプロのメンバーは裏方としてイベントを支える役を担うこととした。

灯りは、しもキッズ手作りのエコキャンドル

やLED電球など約2,000個を準備した。

午前中にしもプロメンバーが下準備をし、午後から、しもプロとしもキッズ、そして保護者も参加して会場を装飾した。



【しもプロとしもキッズの合同企画会議】



オープニングセレモニーはしもキッズが中心となり、替え歌やハピネスダンス、光る棒など児童による趣向を凝らした演出が行われ、非常に盛り上がった。



夕方からキャンドルに点灯し、幻想的な明かりが会場を彩った。

【「下庄の昔ばなし」の活用】

地区内の名所・史跡を紹介する冊子「下庄の名所・史跡」、地域に伝わる昔ばなしをまとめた冊子「下庄の昔ばなし」などを活用し、また、地域資源を理解するため、子どもを対象とした、地域内を巡って名所や史跡に触れ、ふるさとへの愛着と誇りを養うことを目的に、スタンプラリー事業を実施した。

また、各種冊子の製作を契機に、下庄地区をさらに啓発広報するため、「地域の唄」を製作した。

【直売所「下庄青空市」の開催】

6月17日から11月11日までの毎週土曜日に「下庄青空市」を開催した。開催時間は午前8時から午前9時30分まで、お盆には仏花を中心とした朝市も開催した。

地区団体等のイベントでは、使用する農産物を「下庄青空市」で納入するなど、地域との連携も図った。



【下庄まつり記念イベントの開催】

10月15日(日)に、第30回を迎える下庄まつりを記念するステージイベントを開催した。



【まちづくりシンポジウムの開催】

1月23日(火)に、「地域の唄」の製作に協力いただいた霊河秀樹氏を講師に招いて、「縁」を繋いで築くまちづくりというテーマで講演会を実施した。

また、3月3日(土)4日(日)に、まちづくり先進地を訪問し、オリーブを活用した先進的なまちづくりについて研修した。

まちづくり

シンポジウム

(1月23日)



先進地視察

(3月3日)



4 事業の成果

【後継者の育成】

4年目となる水辺の灯りまつりは、イベントだけでなく事前の準備を兼ねた河川清掃(木瓜川クリーン作戦)を実施しており、沿線地域に木瓜川クリーン作戦の実施日に合わせた社会奉仕を同日開催で実施しており、木瓜川の清掃をしながら地区内を移動することで、地域住民にイベントの周知や趣旨の理解を得られるとともに、一緒に清掃活動をするという一体感が生まれたと考える。また、クリーン作戦には下庄をよくする会や下庄倶楽部の会員のほか陽明中学校の生徒など多数のボランティアの参加が得られた。

同じく3年目となる、しもキッズとの共催による「下庄キャンドルナイト」は、実行委員を務める児童たちとの活発な意見交換によりイベントを作り上げることができた。地域の若者グループ「しもプロ」は、子どもたちの熱い思いを実現させるための裏方としてその力を存分に発揮することができた。今後も継続的に事業を実施することで、児童の地域愛が育つことが期待される。

下庄をよくする会が、しもプロの活動に財政面を含めた活動の支援を行っており、しもプロ会員にも地域行事のスタッフとしての参加を呼びかけ、まちづくり活動の若手後継者づくりの一助となっている。

【「ふるさと探訪 下庄の名所・史跡」「下庄の昔ばなし」の活用】

今年度も冊子『ふるさと探訪 下庄の名所・史跡』の活用を図るため、小学生を対象に地域内の名所史跡を廻って学習するスタンプラリーを実施した。

夏休み期間で実施したため、大勢の児童が参加して地域内の名所史跡を訪れ、新たな発見と

ともにふるさとを学ぶ機会を提供することができた。

また、名所史跡のさらなる広報を図るため、「地域の唄」の製作にも取り組んだ。

【直売所「下庄青空市」の開催】

協議会を開催し、下庄青空市のスムーズな運営に向けて意思統一を図るとともに、レジシステムの操作研修を実施し、特定の参加者にレジ業務が偏らないよう、負担軽減を図った。

青空市のオープンにあたっては、下庄をよくする会の機関紙である「下庄しるべ」で広報するなどしたが、告知前からオープン期日の問い合わせが来るなど、地域への周知が浸透してきた。開店時刻前から来店する客も多く、早々と売り切れることもあった。

また、作物の作付け前に栽培講習会を実施するなど、青空市の継続的な開催に向け、品質向上や新たな出品野菜の掘りおこしなどに努めた。

【まちづくりの研修の開催】

これまで継続的に実施してきた下庄まつりも第30回を迎えることから、まつりをより盛り上げ、地域づくりの機運を高めるため、記念のステージイベントを開催してまつりを盛り上げた。

また、「地域の唄」の製作で協力頂いた霊河氏を講師に招き、「ご縁をつないで」と題して、「縁」を繋いで築くまちづくりについて理解を深め、まちづくりへの想いを改め感じることができた。

さらに、まちづくり先進地の視察研修でオーブを活用したまちづくりについて研修し、新たな特産によるまちづくりの可能性について理解を深め、まちづくりへの想いを新たにすることができた。

5 今後の展望

若者グループ「しもプロ」の活動もまだ組織基盤が脆弱であり、事業を継続し、会を存続させていく上でも、会員の増強が緊急の課題であり、会員の勧誘や活動の広報に取り組んでいる。会員も徐々に増えているが、企画段階での参画ができずイベント当日のスタッフ活動のみという会員も多いのが現状となっている。持続的な活動を促すため、会員の自主性を尊重しつつ、「地区内の資源を利用しながら、自らも楽しめるような事業を企画、実施する」という会の趣旨に沿う活動を今後も支援して会員の増強を図り、まちづくり活動への参加も働きかけていく。

地区内の名所・史跡の活用については、今後も積極的に活用するため、学習活動や史跡めぐり、さらなる学習を深めるためのアイテムづくりなど事業展開を継続する。

下庄青空市は、「市」の継続的な開催をめざし、出品野菜の品質向上を図り、新しい品種、珍しい品種の栽培を手掛けていく。また、青空市を利用する客は年齢層が高いためか、目新しい野菜を敬遠しがちであるが、消費者が望む野菜の品質向上と、新しい野菜の掘り起こしにも尽力し、安全で安心な農産物への関心が高いと思われる若い客層に向けた販売を強化する。